

海龍王寺

海龍王寺の創建は飛鳥時代（552～645年）であり、当初は仏教の守護神である毘沙門天を祀っていた。宮廷の有力者であった藤原不比等（659～720年）が、この寺の敷地を取り囲むように住居をつくった。731年、不比等の娘の光明皇后（701～760年）が寺の名前を改めて海龍王寺とした。文字通り「海の竜の王の寺」という意味である。寺にまつわる重要な物語には、仏教の僧、玄昉が登場する。玄昉は危険な旅を経て中国の唐王朝へと渡った僧である。唐からの帰路、彼が乗った船団が激しい嵐に襲われたが、経を唱え続けた結果、玄昉は生き残った。玄昉は5,000巻の貴重な経典を中国から持ち帰り、海龍王寺にもたらした。玄昉は海龍王寺の住職となり、ここに日本初の写経場を設立した。それ以来、海龍王寺は、応仁の乱（1467～1477年）や1614年の慶長地震、また明治時代（1868～1912年）の初期の廃仏毀釈の運動など、幾度かの衰退の時期を乗り越えてきた。最近では、海龍王寺は第二次世界大戦後に復興された。今日、この寺には、十一面観音像や五重塔など、数多くの重要文化財が収められている。